【ポスター発表】

# 障害児者にかかわるボランティア活動のインセンティブに関する研究

○　周南公立大学　　守本　友美（01619）

井上　浩（周南公立大学・02450）、北村　光子（周南公立大学・010342）、金子　幸（周南公立大学・010343）

キーワード：ボランティア活動、インセンティブ、ボランティア活動の有償化

## １．研 究 目 的

近年「有償」も含めたインセンティブ付きのボランティア活動が着目されている。ただし、ボランティア活動の有償化が、参加の動機にどの程度寄与しているのか、具体的にはインセンティブはインセンティブ（誘因）でしかないのか、またインセンティブの種類の違いは活動の継続に関係しているのか、無償ボランティア活動のみに拘る方の思いなどは明らかにされていない。従来からボランティア活動の特性として、自発性・内発性・無償性・社会性が挙げられてきたが、多様化したボランティア活動の種類を分類し、それに合致する特性自体を再検討する時期にきている。

そこで本研究では、①ボランティアを受け入れている障害児者入所施設職員、②ボランティアに支援を受けている障害者当事者、③ボランティア活動を継続しているボランティア個人を対象とした調査研究を通してインセンティブの特性を確認し、その効果についてボランティア活動の展開及び捉え方の観点から検証することを目的とする。

## ２．研究の視点および方法

ボランティア活動へのインセンティブに関しては、川嶋ら（2014）は有償ボランティアにおける金銭的謝礼がボランティア参加動機に与える影響を調査した。井出（2019）は子育て支援における有償性は自発性と社会性を高める要因となっていることを明らかにした。

一方、海外の研究においては、金銭的インセンティブに関してボランティア活動が有する利他的な社会的行動を阻害し得ることの指摘(Ariely et al.,2009)や、Albeler & Nosenzo（2015）と Krawczyk（2011）の研究のように、金銭的インセンティブの影響はほとんどなかったことも示されており、インセンティブがボランティア活動に与える影響についてのコンセンサスは得られていない。

したがって、本研究においては、特に障害児者福祉領域におけるボランティア活動に影響を与えるインセンティブについて類型化を試みる。

そのための研究方法は以下のとおりである。

研究①：A 地方の障害児者入所施設 375 か所のボランティア受け入れ担当者に対して自計式質問紙調査を実施した。調整変数は、施設の特性、担当者個人の基本属性とし、独立変数はインセンティブの実施の有無及びインセンティブの種類とした。従属変数は、ボランティア活動の捉え方を使用した。調査期間は 2024 年 1 月から 2 月であった。

研究②：研究①の質問紙調査の返送者の中から紹介していただいた当事者およびボランテ

ィア、またB圏域の関係機関から紹介していただいた当事者7名およびボランティア5名を対象とした半構造化面接調査を実施した。当事者に対しての質問項目は、自身がかかわったボランティアに対する印象・ボランティアに望むこと・有償ボランティアについての考え、ボランティアに対しての質問項目は、活動内容、活動を通して感じたこと、有償ボランティアについての思いなどであった。調査期間は2024年4月から5月であった。

## ３．倫理的配慮

質問紙調査においては、調査は匿名であり、調査への協力は任意であること、統計処理を行うために個人が特定されないことなどを記載した研究説明書を同封し、調査票を返送していただくことで調査研究に同意したものとする旨を記述した。インタビュー調査においては、研究倫理遵守に関する誓約書に基づき口頭説明を行うとともに、書面による同意を得た。結果の記述においては、個人が特定される可能性のある情報を削除するとともに、プライバシーを考慮し、具体的な事例の概要やインタビューデータの引用は、結果の解釈に必要となる最低限の内容にとどめた。本研究の実施にあたっては、報告者が所属する周南公立大学研究倫理委員会の承認を得た（承認番号：2023-18、2024-1）。

なお、本報告に関連し、開示すべきCOI関係にある企業等は以下の通りである。

・公益財団法人みずほ福祉助成財団より研究助成金の交付を受けている。

## ４．研 究 結 果

研究①：調査対象施設375件のうち返送があったのは105件で回収率は28.0%であった。回答のあった105件のうちボランティアを受け入れているのは95件（90.5%）であった。ボランティアに対して行っていることで多かったのは「ボランティアとのミーティングを実施している」（59.6%）、「感謝の気持ちを日常的に伝えている」（46.1%）であった。また、金品の提供については「ボランティアに食事を提供している」（32.6%）、「ボランティア保険の保険料を施設が負担している」（24.7%）、「ボランティアに謝金を払っている」（10.1%）、「ボランティアに交通費を支給している」（6.7%）であった。

研究②：当事者からのボランティアに対する印象は「すごいこと」であった。有償ボランティアに対しては「良いこと」という感想とともに「自分もやってみたい」という意見も見受けられた。一方、ボランティアは、施設から金品を受け取ることはないが、特に求めてはいない。職員や利用者からの謝意が自身の意欲向上につながっている。

## ５．考 察

障害児者施設がボランティアに対して行っていることに関して、ボランティア側からは「感謝の気持ちを伝えられる」といった、謝意的インセンティブが有効であると考えられる。また、ボランティアに金品を提供している施設もあり、当事者は「有償」の活動に興味を持っていることから、ボランティア活動の参加者を拡げ、「助けー助けられる」という一方的な関係を打開する意味では金銭的インセンティブが有効になると示唆される。したがって、インセンティブの類型化の軸として「謝意的」「金銭的」が設定できる。